

農作物生産情報 (令和6年4月)

気象

(令和6年3月21日 仙台管区気象台発表 東北地方1か月予報より)
向こう1か月の天候は、天気は数日の周期で変わり、平均気温は、高い確率60%である。

水稲

種子の休眠が深い可能性があるので、浸種や催芽の適切な作業を徹底しましょう。

1 育苗

(1) 浸種

令和5年産種子は休眠が深い可能性があるので、温度管理を丁寧に行う。

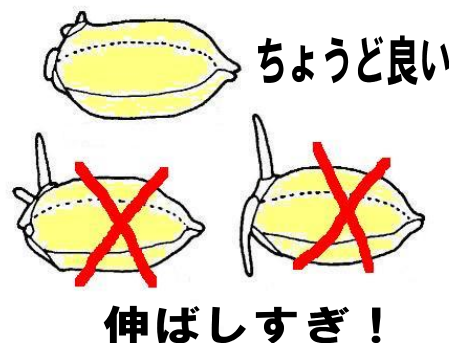
浸種は10日～14日間程度（日平均積算水温で100℃が目安）、浸種時の水温は10℃以下にならないようにする。低温で浸種した場合、日平均積算水温で100℃を確保しても、出芽不良や出芽遅れの原因となる場合があるので注意する。

(2) 催芽

育苗器などを利用し、吸水させた粃を30～32℃で16～20時間加温し、ハト胸程度（芽の長さ0.5～1ミリ）にする。

「はれわたり」は「まっしぐら」等よりもハト胸状態に達するまで時間を要するので、別に管理する。

温度が40℃以上になると発芽率が低下するので、特に風呂を使う場合は注意する。



(3) は種

中苗のは種量は、1箱当たり乾粃で100g（催芽粃で125g）とし、厚播きにならないよう注意する。

(4) 育苗土の準備

ふるいにかけて育苗土は、床土と覆土を合わせて1箱当たり5斗程度準備する。施肥量は、中苗散播・基肥方式で窒素・リン酸・加里を成分量で1箱当たり各2.5gとする。

(5) 苗立枯病の予防

床土はpHが4.5～5.5の土を使用する。pHが高い場合はpH調整剤で調整する。育苗中は適温を保ち、過湿や過乾燥を避ける。

■ 薬剤による主な防除方法

適用病害	剤型	粉剤（土壌混和剤）	液剤（は種時かん注）
ピシウム菌		タチガレエース	タチガレエース
フザリウム菌	M粉剤	8g/箱	ナエファイン
リゾープス菌 (くものすかビ)	ダコニール粉剤	15~20g/箱	1000倍液を1 $\frac{1}{2}$ リットル/箱
		6~8g/箱	ナエファイン
			フロアブル
			2000倍液を1 $\frac{1}{2}$ リットル/箱

(6) 置床の準備

ア 하우스育苗方式

置床は育苗箱の底と密着するよう均平にする。砕土が不十分な場合や足跡等のくぼみがあると生育ムラができるので十分注意する。

イ トンネル折衷育苗方式

置床の硬さは耳たぶ程度に調整し、必ず排水溝を設ける。やわらかく、育苗箱が床土に沈み込むようだと、過湿による出芽障害となるので注意する。

(7) 温度管理

生育に合わせた温度管理を行うため、必ず温度計を苗の高さに設置する。

ア 出芽期まで

日中 35℃以下。ハウスでは、シルバーポリトウなどの被覆で、水分保持と保温をする。天気の良い日には、出芽前でもハウスの換気を行い、35℃以上にならないように注意する（シルバーポリトウは風でめくれないう、箱下に折り込むか、重しを置く）。

イ 出芽揃期~1.5葉

日中 30℃以下。ハウスの大部分の箱で7~8割程度の出芽が見えたら、早めに被覆資材を除く。持ち上がった覆土はかん水等で落ち着かせ、種籾が露出していたら土をかける。

ウ 1.5~3葉

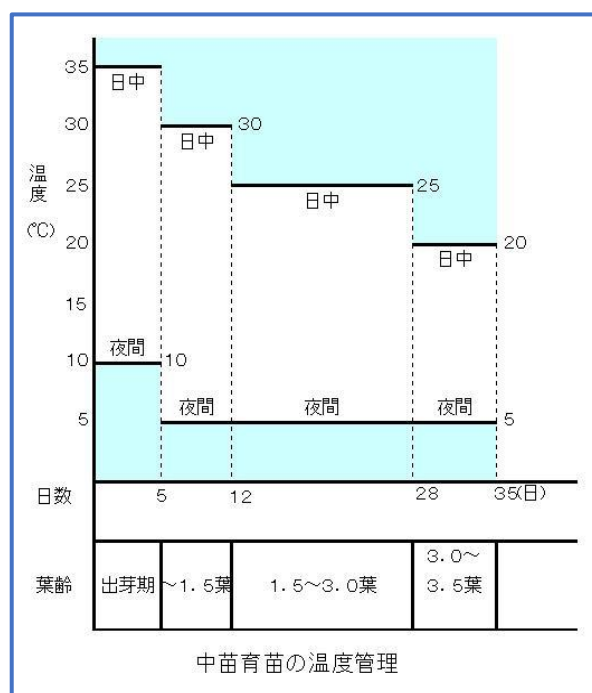
日中 25℃以下、夜間 5℃以上。

エ 3葉以降

日中 20℃以下。天気の良い日は外気に慣らし、苗を丈夫に育てる。

※霜・低温が予想される場合

被覆資材での二重被覆を行うか、ハウス内に暖房器具を入れて保温する。



(8) 水管理

かん水は、床土が乾いたら午前中（地温が上がる前）にたっぷり行う。

機械的に毎日かん水すると、箱内の根張りを弱くし、軟弱徒長苗になりやすいので注意する。

2 本田作業

(1) 施肥（基肥）

品質と食味向上のため、窒素の総量は、「まっしぐら」・「はれわたり」の場合7～10kg/10aとする。基肥量は1回追肥体系の場合は総量の7～8割、2回追肥体系の場合は総量の6割とする。いずれの品種も側条施肥の場合は、基肥を2割減ずる。

「青天の霹靂」の基肥窒素成分は6kg/10a以内とし、全層穂肥1回追肥体系を原則とする。

多肥栽培では、倒伏したり、いもち病にかかりやすくなるほか、食味・品質の低下につながるため、前年のいもち病の発生程度や倒伏状況に応じて基肥量を加減する。

大豆の復元田では、生育が過剰となり、倒伏のおそれがあるので基肥8割減～無肥料とし、追肥は生育量や葉色を見て判断する。小麦の復元田では、基肥4～6割減とし、生育に応じて追肥を行う。

復元田では、倒伏軽減と初期生育確保、登熟向上のため、ケイカルとようりんを施用すると効果的である。

(2) 耕起・代かき

耕起作業は耕す深さは15cm程度を目標にしていねいに行う。

稲わらを鋤き込んだ水田では、浮きわらを抑えるため水深を浅めにして代かき作業をする。

小 麦

排水対策や適期追肥に努めよう！

1 湿害防止

転換畑等では、融雪水、降雨水が長時間停滞しないよう、明きょや排水溝の補修、補強を行い、ほ場外に速やかに排水できるようにしておく。

2 追 肥

消雪後、幼穂形成期までのなるべく早い時期に追肥を行う。

追肥量は窒素成分で2kg/10aを基準とし、ほ場の地力等を考慮して増減する。

3 病虫害防除

越冬前の生育量が多く繁茂しているほ場では、うどんこ病の被害が大きくなるので、適期防除に努める。

りんご

春作業の準備を急ごう！

今年は気温が高く推移していることから、りんごの発芽が平年（板柳町五幾形「ふじ」発芽日平年：4/8）より早くなると見込まれ、前年同様、3月中に発芽する可能性もある。自園地の状況を確認し、剪定した枝の片付けやスピードスプレーヤの試運転を行うなど春作業の準備を急ぐ。

また、発芽後は耐寒性が急激に低くなり、開花期が最も寒さに弱いいため、結実確保に向け、低温や降霜への対策を行う。

1 霜害防止対策

今年は生育が早いと見込まれることから、霜害防止対策には万全を期す。一般に、降霜は晴天無風で、前日午後7時の気温が6℃以下のときに危険性が高い。霜害が予想される場合には、气象台から霜注意報が発令されるので、これらの情報に注意する。

■燃焼法による防止

種類	利用方法
A重油オイル缶	4リットル缶を利用する場合、10a当たり30缶以上を配置する。
霜カット	おがくず：灯油＝2：1（容量）の割合で混ぜたものを2kgずつ袋に詰め、10a当たり40～60個を配置する。

注) 1 灯油の保管量が200～1000ℓ：少量危険物貯蔵届出書の提出が必要

2 " 1000ℓ以上：危険物取扱者の資格が必要

3 所轄の消防署に「火災と紛らわしい煙又は火災を発生する恐れがある行為の届出書」などを提出する。

2 野ネズミ被害樹の治療

少雪だったため、野ネズミによる被害は少ない。ただし、被害の影響を受けやすい若木やわい性台樹は、必ず被害の有無を確認し、樹幹を食害された場合は、早めにバッチレート塗るか、テープを巻いてカルス形成を促す。

3 雪害を受けた樹の処置

冬期間の積雪の影響で、3分の2以上裂開している枝は、ゆ合の見込みがないので剪去する。被害部は腐らん病や銀葉病の侵入門戸となるので、傷口にバッチレート又はフランカトスプレーを処置する。

ア わい性台樹

側枝のゆ合が可能な場合は、早い時期にビニールなどできつく縛って傷口を密着させ、ひもなどで吊り上げる。

側枝が不足となった樹は、目傷等により側枝の発生を促したり、主幹部に接木をして側枝の補充を図る。

イ 普通台樹

回復可能な枝は傷口を密着させて、かすがいやボルト等で補強し、支柱で支える。

樹形を損ねる被害を受けた樹では、徒長枝を利用したり、高接ぎなどで樹形の立て直しを図る。

4 粗皮削り

粗皮削りは、胴腐らの早期発見やハダニ類、ハマキムシ類など病害虫防除のため、必ず実施する。

5 基肥

基肥は雪どけ後、速やかに行い、遅くとも4月20日頃までに施用する。石灰質肥料は基肥を施用後、降雨があった場合は2～3日後に、降雨がない場合には2週間後を目安に施用する。

肥料の施用量は下表のとおりであるが、追肥を計画している園地では、窒素分の6割を基肥とする。

果実の着色が良くない園地や樹勢が強すぎる園地では、施肥量（特に窒素成分）を減らして樹勢が適正になるか観察し、追肥で調整する。

■ りんごの標準施肥量（年間総量、園地全面施用）

区 分		施肥量(kg/10a)			備 考
普通台樹	わい性台樹	窒素	りん酸	カリ	
成 木	6年生～	15	5	5	部分（樹冠下）施肥の場合は、施肥量を減ずる
6～10年生	4～5年生	10	3	3	
1～5年生	1～3年生	5	2	2	

6 病害虫防除

今年は生育の進みが早いと見込まれることから、散布適期を逃さないよう注意する。この時期の散布間隔は10日以内を厳守し、適正な散布量で丁寧に散布する。

散布予定日に降雨が予想される場合は、事前散布に徹する。

■ 薬剤散布（散布時期は生育状況により変わるので、新しい情報を参考にする）

散布時期	基 準 薬 剤	散布量 リットル/10a
ふじの展葉1週間後頃 （4月下旬頃）	マシン油乳剤 200倍 ベフラン液剤25 1,000倍	300
ふじの開花直前 （5月上旬頃）	SDHI 剤	320
ふじの落花直後 （5月中旬頃）	ミギワ20フロアブル 4,000倍 + デランフロアブル 1,500倍 又はチウラム剤 500倍 又はマンゼブ剤 600倍	350

※SDHI 剤は、以下の4剤から選択する。

ネクスターフロアブル 1,500倍 フルーツセイバー 2,000倍
カナメフロアブル 4,000倍 パレード15フロアブル 2,000倍

※チウラム剤：チオノックフロアブル、トレノックスフロアブル

※マンゼブ剤：ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤

7 腐らん病対策

近年は、発生が目立つ。早めに被害部の切除や治療を行って、感染拡大を防ぐ。

枝腐らんは見つけ次第、切り取って処分する。

胴腐らんは再発病斑を含め見つけ次第、次のいずれかの処置を行う。

ア 泥巻きを行う場合は、周辺健全部を含めて病患部に厚く泥を張り付ける。

イ バッチレートまたはフランカットスプレーを使う場合は、周辺健全部を含めて病患部を紡錘形に削ってから塗る。

ウ トップジンMオイルペーストを使う場合は、病患部を削り取り、さらに浸透性を高めるために周辺の健全表皮（上下約5cm、左右2～3cm）を薄く削ってから塗る。なお、再発してしまった場合には、アカイの方法に切り替える。

エ 胴腐らんの発病が著しい樹は、病原菌の伝染源になるので積極的に伐採する。

8 マメコバチの放飼と管理

放飼時期を調節するため、筒内の蜂が動き始め、カチカチと音がするようになった頃に、0～5℃の冷蔵庫に保管する。

展葉1週間後頃の薬剤散布2～3日後に冷蔵庫から出し、放飼する。また、土取り場や防鳥網の設置などの管理も怠らないようにする。

9 人工授粉による結実確保

本年は全般に花芽率が低い傾向であることから、結実確保のため、マメコバチ授粉だけでなく、人工授粉も行う。

10 機械の点検整備と事故防止

4月は、農作業が本格化する時期である。今年も生育が早いと想定されることから、スピードスプレーヤーや草刈り機、高所作業台車等を早めに点検し、いつでも使えるよう準備する。

また、機械作業による重大な事故も発生していることから、走行路や枝の出具合などを確認し、転落・横転・衝突しないよう園内を整備する。

特産果樹

◆ おうとう ◆

摘芽で大玉生産、霜害防止対策を徹底しよう！！

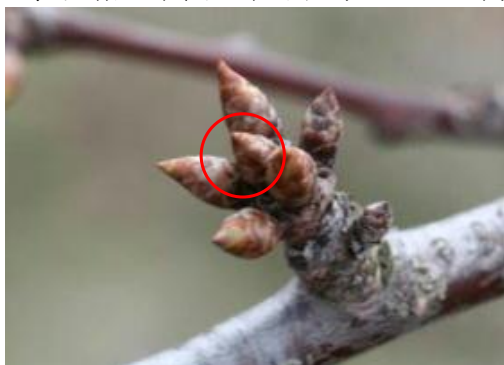
1 霜害防止対策

生育ステージが早いことが想定されるため、りんごと同様、霜害対策には万全を期す。
(詳細はりんごの項3を参照)

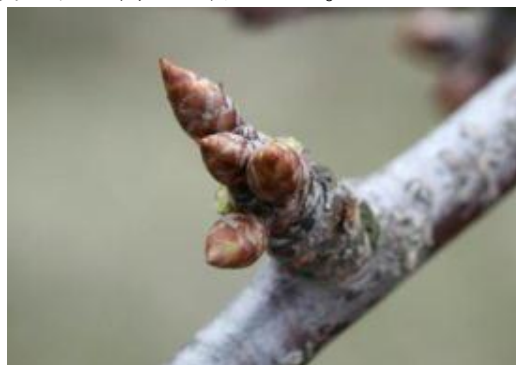
2 摘芽

紅秀峰は着果量が多くなりやすいので、催芽前（4月上旬頃）までに摘芽を行う。花束状短果枝の大きい花芽を3芽程度残して、他の花芽を指でかき取る。葉芽（赤い丸印で囲んだ芽）は残し、人工授粉は必ず行う。

なお、晩霜の常襲地帯や花芽の少ない樹、樹勢の強い樹では行わない。



摘芽前（花芽数：6個）



摘芽後(同: 3個、大きい花芽を残す)

3 結実確保

おうとうの開花期は、低温や強風に遭遇することが多い時期であることから、マメコバチを導入している園地であっても、毛ばたきによる人工授粉を徹底する。

毛ばたきは5分咲き頃と満開期に、計2回実施する。

4 病虫害防除

「開花直前」以降は、散布予定日に降雨が予想される場合は、事前散布に徹する。

■ 薬剤散布（散布時期は生育状況により変わるので、自園地の状況を確認する）

散布時期	基準薬剤	散布量 リットル/10a
発芽前	ハーベストオイル 又はトモノールS 50倍	350
開花直前 (4月下旬)	オーソサイド水和剤80 800倍	450
満開5日後頃 (5月上旬)	パワード顆粒水和剤 1,500倍 又はオンリーワンフロアブル 2,000倍 又はラリー水和剤 2,000倍 又はオーシャイン水和剤 3,000倍	500

※コスカシバの発生が多い園地では、開花前にフェニックスフロアブル 500倍を枝幹部に十分かかるように手散布する。

◆ ぶどう ◆

休眠期防除は黒とう病や晩腐病防除の要！必ず散布する！！

1 園地の点検

雪で傾いた支柱や破損した腕木を取り替え、架線の緩んでいるものは補強して、主枝を結束し直す。また、病害の発生源となる架線上の巻きひげや成り跡、粗皮を除去し処分する。

2 野ネズミ被害の事後対策

野ネズミの食害により回復が見込めない場合は、苗木更新する。

3 施肥

基肥を秋に施用している園地では、4月上旬に全量の10%を追肥として施用する。また、春に基肥を施用する園地では、全量の60~80%を施用する。

昨年8月の大雨の影響で樹勢が弱くなった園地では、施肥の判断は樹の生育状況をみて行う。

■ ぶどう成木の標準施肥量 (kg/10a)

区分	窒素	りん酸	カリ
全量	15	10	10
春が追肥の場合 (秋に基肥)	1.5	1	1
春が基肥の場合	9~12	6~8	6~8

4 病虫害防除



ぶどうの催芽

昨年は各地で黒とう病の発生が目立った。休眠期は、黒とう病や晩腐病防除の重要な時期なので、催芽※前に必ず薬剤散布する。

自園地のぶどうの生育をしっかりと観察し、散布が遅れないよう注意する。

※1 催芽：りん片が開いて褐色の綿毛が見え始めた状態

※2 催芽日：樹全体の20%以上の芽が催芽した日

※3 平年の催芽日 (スチューベン)：4月15日 (平成16年~令和5年の平均値、調査地は鶴田町境)

■ 薬剤散布（スチューベン、シャインマスカット）

散布時期	基準薬剤	散布量 リットル/10a
休眠期 (4月上旬)	デランフロアブル 又はパスポート顆粒水和剤 又はベンレート水和剤	200倍 250倍 200倍
	ガットキラー乳剤	100倍
		200

5 霜害防止対策

生育ステージが早いことが想定されるため、りんごと同様、霜害対策には万全を期す。
(詳細はりんごの項1を参照)
ハウスぶどうでは、暖房器具（石油ストーブ）を用いてハウス内を加温する。

野 菜

温度変化が激しい時期、きめ細かな温度管理に努めよう！

◆ トマト ◆

1 定植準備

ハウスのパイプ等の歪みや、被覆ビニールの破損がないか確認し、早めに修復する。
土壌が乾燥している場合、耕起前に散水し、手で軽く握って崩れない程度の状態で耕起する。
堆肥や改良資材等は定植1か月前、基肥は定植2週間前を目安に施用する。

■ 標準施肥量 (kg/10a)

窒素	りん酸	カリ	備考
10~12	28~35	10~12	冬期間、屋根のフィルムを除覆しない場合、肥料が残るため、基肥量は土壌分析に基づいて減ずる。

定植の7~10日前にはマルチを張り地温を高めておく。

2 定植

定植前日に鉢にかん水する。肥料不足の場合は液肥で追肥を行う。
深さ10cmの地温15℃以上を確保し、定植を行う。植え付けは、花房を通路側に向け、鉢の回りを両手で上から押して土と根鉢を密着させ、根鉢上面と畝面が同じ高さになるように行う。植穴を掘ったときに出土は植穴の周囲に盛り土として置き、マルチの熱が逃げないようにする。
夜間の冷え込みが予想される場合は、不織布のべたがけや加温機を設置する等、保温に努める。

◆ メロン ◆

1 育苗管理

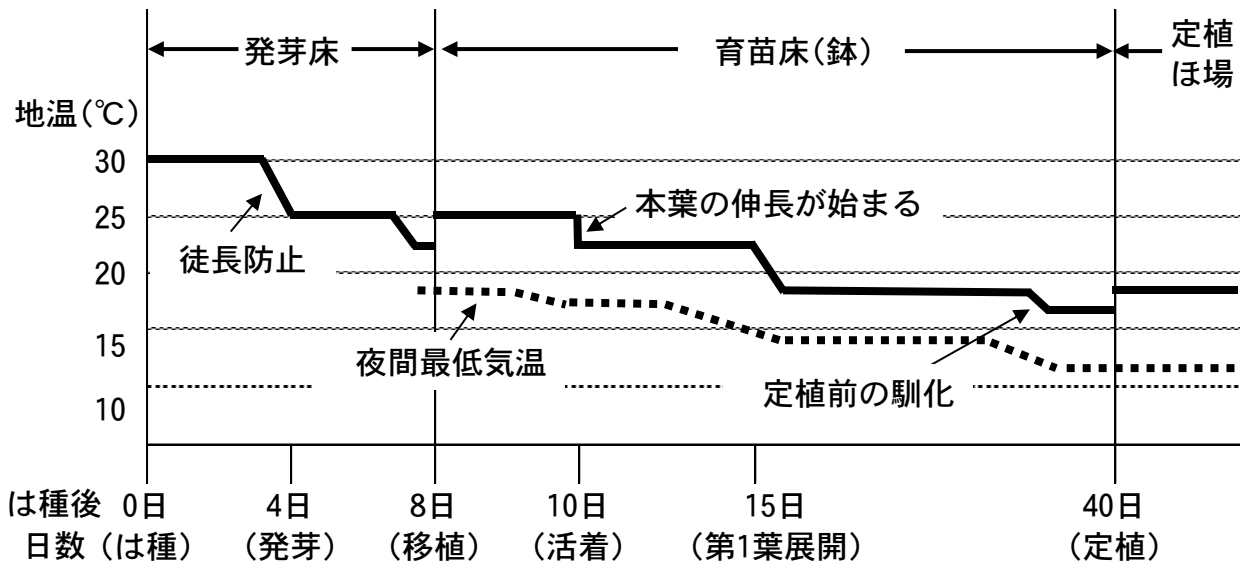
(1) 移植（鉢上げ）

移植1週間前までに鉢に土を詰め、ビニールで被覆し床温（地温）を高めておく。
苗立枯病防止のため深植えせず、温度が下がり始める午後3時頃までに移植を終える。

(2) 移植後の管理

床温（地温）は下図を参考に管理し、トンネル内の気温は15℃～30℃を目標にする。
鉢上げ直後から1～2日間はトンネルを密閉し、日差しが強い時は遮光し、最高気温は30℃以上にしない。3日目からはトンネルを開閉して換気を行い徒長を防ぐ。
鉢の表面が乾いたら、床温（地温）を下げないように午前中に温水をかける。
葉と葉が重なり合うようになったら、鉢ずらしを行い、苗の受光体勢をよくする。この時、外側と内側の苗を入れ換え、生育を揃える。
定植の7日位前から夜温を徐々に下げ、苗を外気に慣らす。

■ 発芽床と育苗床（鉢）の床温（地温）管理



2 本畑の準備

堆肥や改良資材等は定植2週間前に、基肥は定植10日前に施用する。
畝の高さは、畑地では20cm、転作田では30cmの高畝とする。
定植の1週間前にはマルチ、トンネルを張る。マルチは、地温上昇効果や抑草効果の高いグリーンマルチを使用し、深さ20cmの地温を18℃以上に高めておく。また、均一な土壤水分を確保するため、マルチ前に十分かん水するか、降雨後にマルチングする。

3 定植

速やかな活着を促すため、定植作業はなるべく温暖な日に行う。
夜間の冷え込みが予想される場合は、早めにトンネル被覆資材を閉じるとともに、保温キャップや不織布などの資材を併用し、保温に努める。

花き

温度・水管理を徹底して初期生育を確保しよう！

◆キク◆

1 7月・8月出荷の管理

(1) 育苗

育苗期間は15～20日を基本とし、定植日に合わせて計画的に挿し芽を行う。早期発ら
いする品種もあるので、電照等により花芽分化を抑制する。
挿し芽は病害虫に侵されていない健全なものを選定する。

(2) 施肥

全量で窒素成分10～20kg/10aを基準とし、基肥として6～7割を施用する。追肥は、
葉色や生育の状況に応じて適宜行う。

(3) 定植

定植は、無加温ハウス栽培では4月が適期となる。早すぎると奇形花等が発生しやす
く、遅すぎると草丈が短くなるので、仕立方法を考慮して定植時期を決定する。

定植後は活着を促すため、むらなく十分にかん水し、10℃を目標に夜温を確保する。活
着後は、昼温25℃、夜温5℃程度を目安とし、必要に応じて保温や換気を行う。

◆トルコギキョウ◆

1 夏出荷の管理

(1) 秋播き無加温栽培

日照時間の増加、気温の上昇に伴い茎が伸長するので、発らいまで極端に乾燥させない
よう管理する。低節位から分枝が発生した場合は早めに除去して主茎の伸長を促す。

(2) 春播き栽培(4月定植)

ほ場のpHが低い場合、pH6.5を目標に土壤改良する。基肥は基本的に3要素とも
10kg/10a程度であるが、ECが0.4以上の場合は下表を参考に減肥する。

■ 施肥前EC値による基肥窒素量減肥の目安(対基準量)

土壌の種類	0.3ms/cm以下	0.4～0.7	0.8～1.2	1.3～1.5	1.5以上
腐植質黒ボク土	基準量	2/3	1/2	1/3	無施用
沖積土・洪積土			1/3		
砂質土		1/2	1/4		

定植前に地温を12～20℃に高めておき、定植適期の本葉2.0～2.5対(展開葉4枚程
度)の時に定植する。

かん水は地温が急激に下がらないよう暖かい日の午前に行い、極端に乾燥しないようこ
まめに行う。

2 春播き秋出荷のは種・育苗

育苗用土はp H6.5前後で肥料成分が含まれている清潔なものを使う。用土に有機質が多く含まれているとチビクロバネキノコバエが発生しやすいので注意する。

小さいセルで育苗すると老化しやすいため、288穴程度の大きさのセルトレイに1穴1粒播きする。は種後は覆土はせずに、発芽まで昼温20～25℃、夜温15～18℃を目標に管理する。

発芽までは乾燥させないことが重要で、上部からのミストかん水が望ましいが、そのような設備と労力がない場合は底面吸水も有効である。その場合は、育苗箱の底から根が見え始めたら、上部からのかん水に切り替える。

発芽揃い後は、昼間20℃、夜間15℃程度を目安に管理する。

農作業事故に気をつけましょう！

- 必ず、作業の合間に十分な休憩を取りましょう。
- 自分の体力、注意力を過信しすぎず、無理のない作業を行いましょう。
- 家族や周りの人など、地域全体で注意を呼びかけましょう。

農薬適正使用と隣接農地への飛散防止に十分気をつけましょう！

- 使い残した農薬などは、河川等へ絶対捨てない。
- 農薬を使用する場合には、必ず最新の「農薬登録情報」を確認しましょう。
- 農薬は鍵のかかる専用の場所に保管し、管理を徹底しましょう。